
まもりびと

グラーバク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まもりびと

【Nコード】

N4366T

【作者名】

グラーバク

【あらすじ】

東京消防庁？ハイパーレスキュー？

俺らは「消防はん」だ、覚えとけ。

「火消の好物は喧嘩と酒」。そんな風潮がまだ残る、田舎町の消防士達の人情活劇(?)。

火災指令、急行中（前書き）

なんだこの作品（笑）

火災指令、急行中

「坂本隊長、呼吸器は全部開放しておきます」

「そうだなあ、多分、屋内侵入しないといかん。要救助者はいないみたいだが、平屋だし」

緊急走行中の車内で、金子新は中腰になって後部座席に掛かっている四つの空気呼吸器のボンベの弁を回した。圧力はすべて14.5MPa。面体を装着しての活動時間は、ざっと十分程度だろう。

今は七月の初旬。防火衣、通称サシコを全身に纏うだけでサウナにでもいるかのように汗が噴き出してくる。新は額から流れる汗を手袋で拭き取った。何度も使い回した手袋は煙とカビの匂いが少々きつい。これもそろそろ新調しないとイケない。

「あ、黒煙確認しました。結構燃えてますね」

機関員で救助副隊長の高井正志は顔を正面に向けながらも、現場の方角の空を見て言った。

新達の乗る救助工作車は現在全速力で東進中だが、ちょうど車内から見て十時の方向にハッキリと禍々しい、本日の敵が見えた。

「あゝ、こりゃあ多分…」

救助隊長の井森和夫が何かを言いかけたその時、通信司令室からの

無線が車内に響き渡った。

『白浜消防から出動中の各隊。現在同地点の火災報を多数受信中。これより消防団召集サイレンを吹鳴します。なお要救助者にあつては全員脱出済み。以上白浜消防』

「…やっぱりか…。うおっと！」

赤信号の交差点に進入中、左方向からスポーツカーが我々に気付かず、進入してきた。高井は慣れた調子でブレーキと旋回を行い、なんとか衝突は免れた。が、後部座席にいる新は体制を崩し、足元に転がってしまった。助手席の井森は窓を開け、スポーツカーに「止まれよ、バカヤロウ！」と怒鳴り付けた。若い男女のカップルは完全に凍りついて泣きそうな顔をしている。

—そりゃ、隊長みたいな顔の人に言われるとたまらないよなあ。でも、また問題になったりして。

私は元の席に戻りながらカップルに同情した。

「何やってんだアラタ、現場に着く前にケガしてどうする」

同じく後部座席の右端に座る先輩隊員の山本公平は私の方をいやらしい目つきで見てニヤニヤしている。

座席真ん中の若手トップ、住友吾朗は、新の方は見向きもせずにあでもないこうでもない、現場活動の手順を一人考えている。

「すみません。でも、ホント最近多いですね、火災」

「だよなあ。この暑苦しい時期は勘弁して欲しいんだよなあ」

山本は刺し子の襟元を開け、窓を全開にした。

「しかも、大半が原因不明。予防課の連中、原因調査さぼってんじやねえのか」

井森はため息を吐きながら愚痴をこぼした。

「大卒の連中も所詮大したことないってこった。おっと悪い、公平と新は大卒だったな」

高井は分かっているいつもそれを言う。少々口は悪いが根はとてもいい人物で、理不尽な差別をされることもなかったので、新は特に気にはしていなかった。

白浜市消防、城北消防署特別救助隊五名は、今日も平常運転だ。

人口十五万人の田舎町の消防吏員なんて、こんなもんだ。

「うわっ臭えな。ゴムでも焼けてんのか。民家じゃないのかよ」

井森が咳払いをする。現場まで残り約一km。車内に入ってくる外の空気は既に火災現場独特の匂いがし始めていた。

『城東ポンプから各隊。現在火煙は最盛期と思われる。本体の活動は外からの注水のみ。屋内侵入できる状況ではない』

無線の声からして、先着隊の城東消防署はかなり慌ただしいようだ。

「聞いたか、城東の皆さんはビビって中に入れないそうだ。この中でビビってる奴、手え挙げて！はい！」

井森はケラケラ笑いながら自分が手を挙げた。全員がそれを見て爆笑する。

「最盛期だって、ああこええ。タツプリ水かけてもらってから入ろう」

山本はそう言いながら開けていた刺し子の襟を一番上まで締め上げた。

「進入はまず俺と吾朗で行く。アックスだけ持ってけ。あとの三人はウチのポンプからホース延長して、援護注水の準備。体勢が整い次第進入するぞ。木造の平屋だ。どうせ中から水かけんと消えんかな」

「よし！！」

井森はさっきまでの茶化した口調とは打って変わって、四人に命令した。

「はい、まもなく現着」

高井はサイレンを止め、停車した。

火点はここから民家を3軒隔てた、すぐそこだ。車内にまで火点の放射熱が入ってくる。熱い。

パチパチと弾ける真っ赤な炎に、飛び交う怒号。野次馬と近隣住民の悲鳴。

ここが、新達の仕事場だ。

「さあ、落ち着いていこうぜ」

高井は副隊長らしく、若手三人に喝を入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4366t/>

まもりびと

2011年10月8日22時53分発行